

第二部「市民社会の変遷に関する現代史的考察」序文

Foreword to “the Study on the Transformation of Civil Society”

加藤 雅俊*

第二部「市民社会の変遷に関する現代史的考察」では、博士後期課程に在籍する大学院生の研究成果を中心に紹介する。

新自由主義的なグローバル化が進む現代社会において、自由で公正な社会を実現するためには、「国家」と「市場」という二項対立を越えていく必要がある、その際の手がかりとなるのが「市民社会」という概念である。しかし、その一方で、市民社会には固有の問題点や課題があるのは言うまでもない（より正確に言えば、市民社会が円滑に機能するためには、特定の条件・文脈が必要である）。第一部の巻頭企画で紹介したように、「グローバル化と公共性」研究会では、これまでの研究蓄積のなかで、市民社会の重要性を認識し、その可能性と課題を理論的・分析的に検討してきたが、その実態に関する経験的研究は十分に行うことができなかった。

これらの問題点をふまえて、現代社会において市民社会が果たしてきた役割を多角的に検討する、若手研究者を中心とした研究会（若手研究会）を、「グローバル化と公共性」研究会の内部に立ち上げ、活動を続けてきた。第二部に所収された論文は、その成果の一部である。

鈴木論文は、「原爆の絵」に注目して、広島における原爆体験とその記憶をとどめるための市民の実践、および、その社会的意義について検討したものである。「原爆の絵」に関しては、美術史や文化史の領域ですでに研究が

* 立命館大学産業社会学部准教授

進められてきたが、鈴木論文は、一次資料を用いて、当時の社会的状況や歴史的な文脈を検討することで、「原爆の絵」が有する社会的な意義を明らかにしている。加えて、鈴木論文は、この市民の実践と、当時の代表的な社会運動のひとつである核廃絶運動との関係性を検討することで、社会運動とは異なる「市民の運動」がもつ重要性を明らかにするだけでなく、「社会運動」の課題も析出している点で、学術的貢献をなしている。言い換えれば、鈴木論文は、市民社会における多様な活動に目を向ける必要性を示唆している。角田論文は、特攻隊慰霊顕彰会を事例に、歴史認識の脱文脈化や精神の称揚という点に注目して、戦争関係者団体における継承のダイナミズムを分析している。戦争関係者団体に関する先行研究では、主張内容や構成員の属性など、組織の特徴に関する調査や分析が進められてきたが、構成員の世代交代を背景とした組織存続の困難さに関する分析は十分になされてこなかった。角田論文は、一次資料の丁寧な検討を通じて、組織が存続する過程において、後継世代による歴史の読み換えが重要であったこと、そしてそのなかで組織が当初有していた特徴の一部が失われていったことを明らかにしており、学術的貢献をなしている。また、角田論文は、若者の右傾化が議論される現代において、なぜ／どのように保守系団体が人々を惹きつけてきたか、そしてその社会的影響は何かを検討する上で、示唆をもたらすものでもある。加藤論文は、諫早湾干拓紛争を事例として、紛争処理における市民社会の果たす役割の可能性と課題を検討している。ここでは、諫早市と雲仙市に住む住民2,100人を対象としたアンケート調査をもとに、地域住民が、諫早湾干拓紛争を地域の問題として受け止めつつも、紛争を解決するために自ら主体的に行動する意思を有していないことが示されている。その一方で、加藤論文では、諫早湾干拓紛争のような大規模紛争を処理する上では、直接的な当事者だけでなく、地域住民も含めた多様な当事者が未来志向の議論を行い、合意形成を目指すことが不可欠であること、そしてそれを支えるための政治や行政の支援が不可欠であることが指摘されている。言い換えれば、市民社会の

活性化と、その公的な支援、そして両者の有機的連関の重要性が示唆されている。

各論文が扱うテーマは異なり、またアプローチ・研究手法も異なるが、現代社会における市民社会の可能性と課題を検討するという点では共通している。事例研究を増やしていくこと、そして各研究を通じて得られた知見を理論的に総合していくことなど、若手研究会には残された課題も多々あり、引き続き研究を進めていく必要がある。しかし、各論文が、各専門領域への貢献に加え、市民社会の可能性と課題に関する諸研究群に新たな知見を加えるものとなれば幸いである。

